遊びをせんとや 生れけむ

巻／頭／言

遊ぶのが好きである。

高校の頃など、遊ぶ時間を確保するため、休み時間などに脇目もふらずに宿題や予習を済ませていた程である。

大学に入っても、手当たり次第に面白そうなゼミなどに参加した。その一つが川戸佳先生の生物物理であり、大隅良典先生の分子遺伝学である。大隅先生には、医学科への進学を勧めていただき、そこで講義をサボって細胞生物学会のシンポジウムに遊びに行っていた所を廣川信隆先生にめざとく見つけられて今に至る。遊び好きが高じて研究者になったようなものである。

廣川研でも、与えられたテーマだけでなく、いろいろ好き勝手に遊ばせて貰っていた。遊びから始まった結果が発展して大きな成果も幾つか生まれた。

だから、独立してラボを持ったとき、研究室の方針として「エフォートの 20% くらいは遊ぼう」と提案した。Google に就職した同級生から教えて貰った 20% ルールの丸パクリである。

ということで、最初の頃は、楽しく遊べていた。

ところが、最近遊ぶ時間がなくなってしまい、とてもフラストレーションである。単に要領が悪いただけなのだが、申請書だ報告書だと沢山の書類の催促がメールボックスから溢れ、机の上には決済を要する書類が大山脈を形成している。

それ以上に、昨今、「遊びを許さない」風潮が強まっているような気がして心配である。例えば、研究不正や研究費の不正経理などは論外であるが、そのたびに過剰反応気味に“コンプライアンス”が強化される。しかし、本気で不正をする人達に対する抑止になるのか疑問である。それ以上に、「ちょっとした遊び」を抑制し「遊び心」に水をさすデメリットが懸念される。

さて、この「遊び心」という視点から見ると、生物物理学会はユニークだと感じている。語弊があるかもしれないが、遊び心のある研究者が数多くおられる。特に、2019 年の年会は、私など足下にも及ばない遊び人（いい意味で）の永井先生を実行委員長に、以下、関西地区の遊び人の精鋭（もちろんいい意味で）が実行委員となり（私も末席を汚しております）、へべれけになりながら（謎）、かつてなかったような楽しい年会を実現すべく企画立案を進めております。少し先の年会ではありますが、皆様のご協力よろしくお願いいたします。

岡田康志, Yasushi OKADA

理研・QBiC・チームリーダー

東大・理・物理・教授